OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市言語の形成と地域特性 : 近畿中央部における待遇表現法に焦点をあてて
Author(s)	中井, 精一
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49430
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【67】

氏名	中井精一（なかい せいいち）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第　２３２４１　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	都市言語の形成と地域特性－近畿中央部における待遇表現法に焦点をあててー
論文審査委員	（主査） 教授　真田　信治 （副査） 教授　土岐　哲　　准教授　渋谷　勝己

論文内容の要旨

本論文は、近畿中央部の待遇表現形式に注目し、その形成の背景、周辺地域への伝播の考察を通して、ことばの生成と変容、拡大が都市性とどのように密接に関係しているかについて、新しい社会言語学的方言研究の観点から探究したものである。

本論文は６章で構成されている。400字詰め原稿用紙にして約600枚の分量である。

第１章では、日本の社会言語学的方言研究の成立から現在までを鳥瞰し、その特質について論じている。都市化・近代化といった社会構造の変化に日本の社会言語学がどのように向き合ってきたのか、これまでの都市言語研究の方法論を精査することで、新たな社会

言語学的方言研究を展望する。

第２章では、近畿中央部の地域特性を記述し、それを背景に運用される待遇表現形式について、その運用の特徴を分析している。共通語では、敬語・待遇表現は、目上や目下、上司や部下といった社会的に定まった上下関係が基軸となって運用されるのに対して、近畿中央方言の待遇表現では、「お世話になった」「大好きな」「かわいい」といったプラスの評価や「問題を起こした」「大嫌いな」「汚い」といった話し手のマイナス評価・感情が言語形式選択において優先されるという特質を解明した。

第３章では、各地でのフィールドワークによるデータと明治末年から大正初年にかけて編纂された「奈良県風俗誌」を新たな資料として加え、日本語史の観点から近畿中央部で非常に強い勢力を誇っている助動詞「ハル」「ヤハル」、及び軽卑表現の「ヨル」「トル」を対象に、その形成から定着に関して、従来の諸説を整理・修正しつつ、その史的変遷の過程について詳細に分析している。

第４章では、通勤圏の拡大，地域社会の変質等の外的影響によって近畿中央部で急速に普及した大阪型の待遇表現形式に注目し、その受容をめぐって生ずる在来形式との衝突、及び変容を分析しつつ、待遇表現形式全般の動態について、都市特性の観点からの新しい解釈を提示している。

第５章では、近畿中央部方言の待遇表現形式として認められる「ハル・ヤハル」・「ヤル・タル・ラル・ナル・イス」・「ヨル・トル」などの運用について、従来の研究報告でこれらの使用がないとされる周辺地域（大阪府泉南地域・三重県伊勢地域）に焦点をあて、ＪＲ阪和線沿線で実施したグロットグラム（地点×年齢図）調査、及び名古屋市から伊勢市の間で実施した近畿周縁部グロットグラム（地点×年齢図）調査での資料をもとに、待遇表現形式の闘争過程について分析することによって、これまでの方言研究で言及されることのなかったことばの伝播・受容・定着に関する言語普及のシステムを考察している。

ところで、ことばの地域差は、その地域の「特性」、具体的には、その地域の自然環境や社会的・経済的条件、さらには歴史的要因にかかわる住民心理等の複合的な構造、つまり「地域特性」によって顕在化する現象であるとして、人文諸分野の研究成果を援用しつつ学際的総合的に研究を進めようとする動きが最近活発になってきている。その流れを受けて、第６章では、「社会言語学的方言研究の発展と都市言語」と題して、確立期から20年近くを経て、話者属性や会話場面などの言語外的要因のみを分析することで定型化しつつある社会言語学的方言研究の見直しが必要になってきていることを述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文での近畿中央部とは大和・山城・摂津・河内・和泉の五畿内に伊賀を加えた地域のことである。これらの地域は、歴史的に、京都・大阪といった中心都市の影響を受けて、政治や経済をはじめとする社会構造、また言語文化において一体的な都市言語圏を形成している。

本論文は、1980年代の後半に確立した「社会言語学的方言研究」の意義と方法論を精査した上で、近世にいたるまで列島内部における唯一の都市圏であった近畿中央部の待遇表現形式（「ハル・ヤハル」・「ヤル・タル・ラル・ナル・イス」、及び軽卑表現形式の「ヨル・トル」など）に焦点をあて、その運用の特質・史的変遷プロセス・動態・受容のシステムに関して、話者の「社会的属性」といった従来の枠組みから大きく踏み出す、都市としての複合的な構造（「地域特性」）、なかでも経済システムを基盤とした人間関係をめぐる心理面からの考察を加え、新たな見解を提示している。本論文は、1990年代以降に定型化した社会言語学的方言研究に新しい視点を導入するとともに、近畿方言における待遇表現法に関する研究を大きく前進させる内容を持つものである。

近年、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所などの国立大学共同利用機関による学際的な研究プロジェクトが実施され、その共同研究に参加する方言研究者が増えて、方言研究の分野においても、隣接分野で推進されている「地域特性」を踏まえた研究の重要性が認識されるようになってきた。

このような流れをうけて、本論文でも、新しい方言研究の展開には隣接分野との協力・交流が不可欠であることがうたわれている。ただし、その提言にはいまだ啓蒙的な言辞が多い。提言を具体的な行動にうつす必要があろう。その点、共同研究を組織し推進する力を持つ申請者の今後の実践に期待したいのである。

以上のように、本論文は今後の新しい研究展開への指針ともなるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。